



オール・ヨシノ・ニード・イズ・キル

試し読み版

オール・ヨシノ・ニード・イズ・キル

マリア様の庭に集う乙女たちが、今日も戦士のような無粋な笑顔で、背の高い門をくぐり抜けていく。

恐れを知らない心身を包むのは、深い色の軍服。

フォースの隊列は乱さないように、白いセーラーカラーは翻さないように、じつくりと捌くのがここでのたしなみ。

私立リリアン女学園。ここは地獄の底。

緊急事態が発生した。閃光が走り、空がウルトラオレンジ色に染まる。地球がエイリアンに攻撃され、侵略は拡大の一途を辿る。死者はすでに数百万。

侵略を阻止する術はゼロ。特に女子校の被害は甚大。人類の危機だ。

だが、人類は諦めない。やつと五戦目にして初勝利。戦死者と損害の低さは異例、圧倒的な勝利だった。

「この戦争、正直勝てると言い切れますか？」

「もちろん。宇宙人の侵略に対し、私たちは機動スーツ着用のスーパー戦士を造った」

番組インタビュアーにて。リリアン女学園、メディア担当の島津由乃しまづよしは自信たっぷりな答え、こう続けた。

「リリアン勝利の女神、菜々なな。彼女こそが希望の星」

番組でインタビュアーは、スーパー戦士をこう紹介する。

「驚異きょういです。新型の機動スーツで、菜々は参戦一日目に数百体の敵を倒しました」

再びインタビュアーは由乃に質問をする。

「戦況は変わりますか？」

「我々は戦い、必ず勝利します」

由乃が答えた後、番組の最後は入隊を勧める宣伝で締めくくった。

「さあ、あなたも今すぐリリアン女学園・統合防衛軍へ！」

リリアン女学園・統合防衛軍本部。

通称『薔薇の館ばらやかた』にて。

『殲滅大作戦せんめつ、略してKO大作戦ケーオー』

あまり略になつてないような気もするが、將軍の一人、紅薔薇ロサ・キネンシスさまであ

る祐巳ゆみさんの作戦説明を、私こと島津由乃は聞いていた。

内容はこうだ。統合防衛軍はK市E海岸線から上陸作戦を敢行かんこう。その間に月見ヶ丘つきみがおか高校・田倉沢たくらさわ高校の部隊が東部前線から侵攻して、敵を殲滅しつつ合流する。

機動スーツを装備した部隊で押し切るというシンプルな作戦だ。当然、多くの犠牲者が出る。

「となると『責任者』として世の非難を浴びるのは私だ」

祐巳さんは困った顔をして、私を見つめていた。

「回避したいシナリオなのよ。まあ、掛かけて」

立ったまま聞いていた私を氣遣うなつて、祐巳さんは椅子に掛けるように促し、自身も椅子に腰掛けた。

「運命の声に応えた行動だったと言えればいいんじゃない。人類を救うという」

私の助言を聞いて、それでも渋い顔をする祐巳さん。いつ見ても反応が分かりやすい。

「使命感のもとに弾丸作戦を実施したと」

「ううん、私のことはいい。由乃さんは作戦をPRして」

「了解」

「写真部とすぐ出発して。それから海岸で上陸部隊と合流ね」

「海岸？ 上陸部隊？ つまり前線へ？」

「そう、K市よ。桂さんデータによるとE沿岸の敵勢力は手薄だって。成

功すれば孫の代まで自慢できるよ」

「嬉しい話ね……と、言いたいところだけど、私は実戦が苦手だからメ

ディア担当になったのを忘れてない？」

祐巳さんはきよとんとした顔で、私を見つめていた。

「人にはそれぞれ役割があるのよ。私は正直言って、戦士には向いてない

わ

「そのようね。安心して、数十万の戦士が一緒だから」

「名誉ではあるけれど、お断りします」

私は懸命に抵抗した。前線送りなんてまっぴらごめんよ。

「じゃあ、折衷案を出そうじゃない。私に代わる適任者を紹介すればいい

んでしよう？」

「紹介？ これは命令よ」

「私は黄薔薇さまよ。同じ薔薇さまの祐巳さんに命令権は無いわ」

「由乃さんのお姉さま、支倉令さまの了承を得てるんだわ」

ここで令ちゃんの名前を出すとは卑怯な。しかも、なんで勝手に了承してるのよ！

「黄薔薇さまの地位は据え置くから」

「詳細は志摩子さんから聞いてちょうだい。あとは頑張つてね。話はそれだけ」

言いたいことを言い切った祐巳さんは、書類を取り出しサインをしていた。どうやら私が作戦に承諾した旨を伝える書類のようだ。

「祐巳さん。私のPRで大勢の女子高生が軍に志願したわ」

祐巳さんは次から次へと書類に目を向けたまま、サインを続けていた。「彼女らが戦死すると家族は責任者を追求する。私があなたの名を挙げたら、どうなるかしら？」

そこで祐巳さんは手を止め、書類から目を離した。

「避けたい事態じゃない？」

「それは脅迫してるの？」

「明日の戦闘を、海岸で撮影する任務は辞退させてもらおうわ」

「分かった」

「分かって頂けて何より。では、これで……痛^{いた}っ」

去^さり際に椅子に足をぶつけて、つまづきそうになった。

「失礼」

私がビスケツト扉を開けて去ろうとすると、扉の向こうには大勢が待ち構えていた。

「拘束して」

祐巳さんの号令で一斉に襲いかかる手下たち。

私は陣中突破を試みたが、通路を塞^{ふさ}がれ、誰かが持っていた麻醉で眠らされてしまった。

『太^{おお}仲^{なか}女子高等学校』

大勢の軍志願者が集う乙女の園^{その}。現在は統合防衛軍の訓練施設として使われていた。

校内を走るバスには、英雄『菜々』のイラストが大きく描かれていた。『戦場のデコちゃん』という文字と共に。誰かがイタズラで書いたのだろう

か。

目を覚ました由乃は、この光景を目にし、眠っている間にここへ連れ込まれた事を理解した。

私はグラウンドの隅つこに、荷物と一緒に置きっぱなしにされていたのだ。

「立て、三つ編み！」

「痛い！」

蹴り飛ばされて振り向くと、見覚えのある二年生がそこにいた。

「上級生に向かって何？」

「たてつくのか新入生め！ バレエシューズを口に突っ込むぞ！」

「待って、乃梨子」

優雅に頭の縦ロールを二つ揺らしながら、その人は近づいてきた。

「どうしました？」

「ここはどこ？」

「太仲女子高等学校です。あなたは新入生ですね」

「新入生に見えるわけ？」

縦ロールは、私を見て頭の天辺てっぺんからつま先まで、スキヤンするように視線を動かした。

「見えません」

「私は島津由乃。リリアン女学園の黄薔薇ロサ・フェティダさまよ」

「黄薔薇ロサ・フェティダさま？　ここは新入生の訓練施設ですよ」

縦ロールは、首を傾げていた。

「黄薔薇ロサ・フェティダさまが新入生の訓練施設に？」

「徹夜てつや百人ひゃくにん一首いっしゅ？　どんちゃん騒さわぎ？」

私が不祥事ふしょうじを起こして、ここに放り込まれたとも思ったのだろうか。

目つきが明らかに疑うたがっている。

「説明してもムダのようね。令うりやちゃ……お姉さまと話がしたい。電話どこ？」

「上陸作戦がが秒読み段階なんですよ。K市への侵攻直前です。この施設は封鎖中で、通信は禁止です」

縦ロールが持っているノートに目を向けると、学年と名前が書いてあった。この子は二年生だ。

「瞳子ちゃんか」

「紅薔薇のつぼみです」

「小笠原家の者？」

「いいえ、松平家の者です」

「なるほど」

ここで手をこまねいても埒が明かない。何と少しでも電話をかけなければ。

「私をよく見て。何かの間違いでここに送られたの。見れば分かるでしょう？」

私は瞳子ちゃんを睨みつけて、強い口調で迫った。

「どこかで電話をかけられるはずよ」

すると瞳子ちゃんは軽く溜息をついて、こう言った。

「何とかしましょう。こちらへ」

私は瞳子ちゃんと雑談を交わしながら、案内されるまま校内を進んでいた。

「どうぞ」

着いた先は体育館だった。どうみても電話があるようには見えない。

「電話は嘘うそね？」

「そのとおり。あなたも嘘でなかったのは名前だけ」

瞳子ちゃんは手に持っていたノートを広げ、挟はさんであったプリントを私に見せた。

「島津由乃。この者は『脱走者』で黄薔薇ロサ・フエティダさまを装よそおい、拘束された。外部に電話をかけ、作戦の機密を漏洩ろうえいする恐れあり」

なんてこと。祐巳さんここまでやる？

「明日の出撃を逃のがれたらしいけれど、そうはさせないわ。絶対にね」

瞳子ちゃんは険げしい顔で睨にらみつけて、私に告げた。

「一年生、島津由乃ちゃん」

私は無言のまま、一方的に喋る瞳子ちゃんの話聞きながら、体育館の中を突き進んだ。

「人の噂ひきょうものは怖いわよ。夜までに、ここの方たちは結論を出す『あなたは保身第一の卑怯者』と」

「でも、まだ望みはある。戦場で手柄を立てればね。戦いは償いとなるから」

「地獄の戦場が真の英雄を生み出す」

「薄汚い寄生虫レズも、戦場で戦う時だけは皆、同格よ」

体育館の隅っこにいた集団の前で、瞳子ちゃんは足を止めた。

「聞きなさい！ この子は一年生、由乃ちゃん」

「由乃ちゃん、L分隊よ」

紹介された分隊は、六人で構成されているようだ。みんな私を奇怪なものを見るような目で見ていた。

「上級生じゃないの？」

「変わったお下げだ」

「意義ある朝を過ごしたようね」

各々に私の感想を述べる戦士たち。言われて気が付いたが、三つ編みが変な形になっていた。拘束された時に解けて崩れたのだろう。

構わず瞳子ちゃんは周りを物色しながら、話を始めた。

「明日の先陣を切るのは、あなたたち精鋭よ。私の胸は感動に震える、何

たる誇り、何たる榮譽、へソまで涙するわ」

瞳子ちゃんは、マットの下からトランプを見つけ、そのトランプを一枚ずつ、その場にいた精鋭たちの胸元に挿し込んでいく。

「可南子さん、私のギャンブル観は？」

「『地獄堕ち』と」

「それはなぜ？」

「『運命を人に委ねる行為だから』」

「私は『運命』をどう定義して？」

「戦士たるもの運命は自らが支配せよ」

瞳子ちゃんは、可南子ちゃんの胸元に挿し込んだトランプを、さらに深く押し込んだ。可南子ちゃんは僅かに震えていた。

「今は皮肉に思えても、やがてその正しさが分かるわ」

そう言つて瞳子ちゃんは、私に笑顔を向けた。

「由乃ちゃんは脱走者よ。あなたたちの責任において監視するように」

「出撃は明朝六時ちょうど」

「彼女は間違つてここに来たという妄想を抱いてる。逃亡を図つたらボコ

ボコに叩きのめしなさい」

瞳子ちゃんは必要事項を告げ終わると、後ろを向いた。

「出撃なんてムリよ」

私が抗議すると、瞳子ちゃんは私の肩を叩いた。

「感謝してよ。明日、あなたの新しい人生が始まるんだから」

背筋が凍りつくような物言いに少し怯^{ひる}んでしまったが、瞳子ちゃんはそれだけ言うのと、去っていった。

『訓練開始まで一〇分！』

「この服はよくない。着替えて」

私に着替えを差し出してくれた彼女。

『ちさと』と名乗った。

「さあ、新しい日よ」

翌日早朝。お日様も昇らない内から、施設は出撃の準備で慌ただしかった。

「運命の声に応えて勝利しなさい。それが、あなたたちの任務よ」

瞳子ちゃんは見回りながら、精鋭たちに発破^{はつぱ}をかけていた。

私は、ちさとさんから剣道着そっくりな機動スーツを着せられ、身動きが取れずにいた。

「行くわ、ショータイムよ」

機動スーツが作動し、まるで風船から空気が抜けるような、奇妙な音が
出た。

「な、何の音？」

ちさとさんは答えてくれない。気になるじゃない！

「機動スーツは初体験なのよ」

「私は二股ふたまたは未経験だけれど、やれって言われたらやるわよ」
答えになっていない。というか、そんなこと聞いてないし。

「私、慣れてないから味方を攻撃するかも」

「安全装置があるよ」

「どこに？」

「どこかな」

まともに相手する気は無さそうだった。

『立入厳禁』

この学校のどこかにある訓練場の一室。そこで彼女は筋トレに励んでいた。

「時間よ」

出撃の時を告げられた彼女は、機動スーツを身にまとい、大勢が見守る中、外の飛行艇ひこうていへ向かっていく。

「『戦場のデコちゃん』のお出ました。痛いたっ！」

彼女が歩く途中、余計な事を口走った戦士が、彼女——菜々に張り倒された。

同じく出撃するL分隊も、英雄の出撃を見守っていた。

瞳子は由乃を睨にらみながら、ちさとにそつと耳打ちした。

「ちさとさん、由乃ちゃんの面倒を見て」

「一日中？」

「あの子は一日モタないわ」

次々に飛行艇に乗り込む戦士たち。その中で一人、逆方向へ進む戦士がいた。

「ちさとさん、捕まえて！」

「由乃お！」

あつけなく捕まった私は、飛行艇内で固定され、瞳子ちゃんの最終説明を聞いていた。

「今日敗れたら次の戦いはないわ。あなたたちの責任は重大よ」

『降下二分前』

「ビビっても構わない。勇気と恐怖は表裏一体よ」

「あら、あなたのスーツ何か変よ」

「誰か私を見て言っているようだ。」

「そうか、死人が着てるのね」

何の冗談か理解に苦しむけど、みんな笑っていた。

「自分の身は自分で守りなさい。助けは来ない」

瞳子ちゃんも機動スーツ着用で、一緒にスタンバイに入っている。

『一分前！ 降下まで一分！』

「ねえ！ ねえ！ 安全装置の外し方は？」

この期になっても、私は機動スーツの安全装置について解除方法が分からずにいた。必死に隣のちさとさんに尋ねる。

「え？ 何言ってるの？」

騒音が大きくて聞こえてないようだった。私の全身から血の気が引いて

いくのが分かる。

「嘘でしょ……」

『降下開始まで三〇秒！』

「合図を待って、スタンバイ！ 降下ケーブル確認！」

ドオオオオオン！

瞳子ちゃんが号令を言い終わると同時に、飛行艇内で爆発が起きた。敵襲だ！

「降下！ 行け！」

「行け！ 行け！ モタモタしないで！」

次々に降下ケーブルを使って落下していく戦士たち。もう待ったは無しだ。

「由乃ちゃんどうしたの！」

瞳子ちゃんに怒鳴られる。黙っていたら強制的に突き落とされかねない。私は決意して降下した。

「うわあああああああ！」

降下中に他の人とぶつかったりしたけど、なんとか着地に成功。他の戦士たちも次々に着地していた。

「やった！ 着地したわ！」

その直後、可南子ちゃんは落下してきた飛行艇の下敷きとなった。寸前のところで避けて助かった私の額には冷や汗が出ていた。

「救援請う！ 誰か！」

菜々が叫んでいた。それでも菜々は敵を次々に撃破していく。さすがは初日に数百体を殲滅した英雄。

その戦いつぶりに見とれていると、菜々と一瞬目が合った。その直後に菜々の背後にいた飛行艇が大爆発を起こし、菜々は爆風の直撃を受けて私の目前へ吹っ飛んできた。

「ひどい！」

息絶えた菜々を見て、私は叫んだ。無茶だ、こんなの絶対に生き残れない。

「どこへ行くの！ そつちは逆方向でしょ」

戦場から離れようとしたが、瞳子ちゃんに食い止められてしまった。

「話が違う。なぜ敵が待ち伏せを？」

ちさとさんが疑問を投げかけた。

「これじゃ全滅よ。全滅だわ！」

「落ち着いて！」

「しつかり立って！」

「まとまって」

「モモツチ、戦況は？」

「ちさとさん、側面を守って」

誰が何を喋ってるのか、全然わからない。敵の待ち伏せという想定外の状況に前線は大混乱していた。

「安全装置が……こいつの外し方は？」

この際、誰でもいいから教えて。そう願うも虚しく無視され続けた。

「モモツチ！」

「五百メートル先に敵です！」

「もうっ！」

「あなたたち、死にたいの!？」

「攻撃準備！ 構えて！」

「ギタイどもが襲ってくるわ」

「数秒待つて！ 近くに引き寄せるのよ」

私は偶然この時、地面から這い出ようとするギタイを見つけた。

「いたわ！　ここよ！」

繊維せんいで造られた獣のような姿のギタイが飛び出し暴れ、味方を次々に吹っ飛ばしていく。

「うわあああああ！」

サイレンのように響く仲間の悲鳴。安全装置が外れず、私は何もできない。こうしてる間にも次々とやられていく仲間たち。もう後が無い。

『安全装置解除しました』

やった！　どうやったか分からないけれど、思いつく限りの事をやっていたら安全装置が外れた。

籠手こてに装着された竹刀型しなのマシンガンが火を吹き、次々にギタイを殲滅していった。

マシンガンの反動で私は倒れてしまい、仰向けあおむになつて空を仰いだ。

「ははっ、ははははは！」

やれば出来るじゃない私。だけれど、そう思ったのも束の間つか。目の前に新たなギタイが出現した。

マシンガンにもう弾は残っていない。何か武器は……私は横に転がっていた対地雷と書かれた箱を見つけ、握りしめた。

箱を手取る動きに気付いたギタイは、私の上から襲いかかってくる。来るなあ！ 私は箱を手にしたままギタイに叩きつけた。

ドオオオオオン！

地雷が大爆発し、ギタイと共に致命傷を負った私は、ギタイの青い血を大量に浴びながら、息絶えた。

「うわああああつ！」

気が付くと、見覚えのある景色が広がっていた。

目の前を走るバスには、英雄『菜々』のイラストが大きく描かれていた。『戦場のデコちゃん』という文字と共に。

私はグラウンドの隅っこに、荷物と一緒に置きっぱなしにされていたのだ。

「立て、三つ編み！」

肩を蹴^け飛ばされ、痛みが走る。

「バレエシューズを口^{くち}にねじ込むぞ！」

「待って、乃梨子」

優雅に縦ロールを二つ揺らしながら、その人は近づいてきた。

「どうなさいました？」

「瞳子ちゃん……」

「私の名前ですね。分かった、何です？ 徹夜百人一首？ どんちゃん騒ぎ？」

「分からない」

「なるほど。何とかしましょう、それを私に」

瞳子ちゃんは、私に押し付けられたバレエシューズを寄越すように促した。いや、そんな事より気になる事がある。

「今日の日付は？」

「あなたには——」

瞳子ちゃんは手に持ったノートからプリントを取り出し、私に見せて告げた。

「しんぱん審判の日よ」

私は瞳子ちゃんに言われるままに付いていった。

「でも、まだ望みはある。戦場で手柄を立てればね。戦いは償いとなるから」

「地獄の戦場が——」

「真の英雄を生み出す」

私は瞳子ちゃんと同じ台詞を言い放ちハモった。

「話の腰を折るの？」

瞳子ちゃんは不機嫌ふきげんそうに私を睨んだ。

「あなたは、私の話を信じないでしょ」

「そのとおり。どこまで話したかしら？」

「地獄の戦場が……」

「地獄の戦場が、真の英雄を生み出す」

面倒なので今度は黙る事だまにした。

「薄汚い寄生虫レズも、戦場で戦う時だけは皆、同格よ」

体育館の隅っこにいた集団の前で、瞳子ちゃんは足を止めた。

「聞きなさい！ この子は一年生、由乃ちゃん」

「由乃ちゃん、L分隊よ」

紹介された分隊は見覚えのある人たちばかりだった。みんな私を奇怪な

ものを見るような目で見ていた。

「上級生じゃないの？」

「変わったお下げだ」

「明日の先陣を切るのは、あなたたち精鋭よ。私の胸は感動に震える、何たる誇り、何たる荣誉、へソまで涙するわ」

瞳子ちゃんは、マットの下からトランプを見つけ、そのトランプを一枚ずつ、その場にいた精鋭たちの胸元に挿し込んでいく。

「可南子さん、私のギャンブル観は？」

「『地獄墮ち』と」

「それはなぜ？」

「『運命を人に委ねる行為だから』」

「私は『運命』をどう定義しています？」

「『戦士たるもの運命は自らが支配せよ』」

私は一字一句、間違うことなく同じ台詞を言った。この場面を私は知っている。額ひたいから嫌な汗がにじみ出た。

瞳子ちゃんは可南子ちゃんの胸元に、トランプを深く押し込んだ。

「今は皮肉に思えても、やがてその正しさが分かるわ」

瞳子ちゃんは、笑顔で私に答えた。

「行くわ、ショータイムよ」

ちさとさんの合図で、私が機動スーツを操作すると、作動した竹刀型の
アームが、ちさとさんに当たりそうになった。

「もう、気をつけて。着たことないの？」

「かもね」

「安全装置は？」

「分かんない」

ちさとさんは、一瞬呆気あっけに取られたが、いいねって言って私の肩を叩い
た。何がいいのやら。

それから成すがままに機動スーツを着て、飛行艇に乗った。艇内で瞳子
ちゃんが語る。

「あなたたちの責任は重大よ」

『降下二分前』

「ビビっても構わない。勇氣と恐怖は表裏一体よ」

「ねえ！ ねえ、あなた！ そのスーツ変よ」

「そうか、死人が着てるのね」

みんな笑っていた。何がおかしいのか全然わからないけれど、あらゆる
意味で私は笑えなかった。

「自分の身は自分で守りなさい」

「助けは来ない」

私は台詞をハモらせた。

「ハモった！」

ちさとさんのツボだったらしく、ウケていた。

「合図を待つて。スタンバイ！」

瞳子ちゃんも機動スーツ着用で、一緒にスタンバイに入っていた。

『降下ロープ確認、三〇秒前！』

ドオオオオオン！

飛行艇が敵襲を受けて爆発する。周りは大混乱に陥った。

「モタつかないの！」

次々にロープで降下していく戦士たち。あの時と同じなら、ここは降りるしかない。意を決して私は降下した。

「うわあああああああ！」

私は水浸しみずびたの泥どろの上に着地した。

「着地したわ！」

続けて着地を喜ぶ可南子ちゃん。

「危ない！ 後ろ！」

私は叫んだが、間に合わなかった。可南子ちゃんは落下してきた飛行艇の下敷きとなった。

私はひよつととしてと思い、辺りを見渡した。そこには菜々の姿があり、敵を次々に撃破していた。

「よけて！」

菜々に向かって叫んだ。だが、爆風は菜々の背後から迫ってくる。私は菜々の身を庇かばって一緒にふっ飛ばされた。

「んもうっ、やられた」

体が痛い。私は重傷を負ってしまった。菜々の方も、かろうじて一命を取り留とどめたようだ。

「重傷？ 血が……血が出てる？」

私が心配して菜々の様子を見ると、機動スーツが損傷していて、血が出ている。

「胸に穴が開いています」

菜々は苦しそうに答えた。

「穴が？」

私が驚いたその隙に、菜々は私の機動スーツからバッテリーパックを抜き取った。バッテリーが無いスーツは重く微動だにしない。

「私のバッテリーを取ったの？」

菜々は大きな木刀ぼくとうを手に取り、無言で去っていった。その直後、身動きが取れない私にギタイが襲いかかってくる。

「来るな！ やめて！」

衝撃と共に、私の視界が真っ暗闇になった。

「うわああつ！」

気が付くと、見覚えのある光景だった。

目の前を走るバスには、英雄『菜々』のイラストが大きく描かれている。『戦場のデコちゃん』という文字も書かれている。

私はグラウンドの隅っこで、荷物と一緒に寝転がっていた。

「立て、三つ編み！」

乃梨子ちゃんを無視して走り、私はグラウンドに向かってくる縦ロールを呼び止めた。

「瞳子ちゃん」

縦ロールは、いきなり名前を呼ばれて戸惑っていた。

「私はリリアン女学園の黄薔薇さま、島津由乃。メディア担当をしているわ」

「徹夜百人一首はしてない、そのプリントは私を『脱走者』と、あなたは松平瞳子ちゃん、紅薔薇のつぼみでしょ？ なぜ知ってるかを聞いて。施設全員の命を救えるわ」

「話を聞いて、私は全てを見てるのよ！ この目で全てを見たの！ 私たちは全滅する！」

「分かったわ、手を離して！」

矢継ぎ早に喋る私に圧倒された瞳子ちゃんは、私に言われるままに体育館へ案内した。

「L分隊でしょ？」

「そのとおり」

「よく知ってるでしょ？ 私を知ってる者は？」

「知らない」

「でしょ？ 知らない！」

「あなたは可南子ちゃん、あなたはモモツチで……本名は百ちゃん。笙子」

ちゃん、日出実ちゃん、ちさとさん、あなたは……あなたは無口^{むくち}だわ」

L分隊の六人全員知っていることをアピールした。最後の一人だけ名前が出てこなかったけど、多分聞いてない。

「体育マット上でポーカールを」

「黙ってよ」

瞳子ちゃんがうんざりとした表情で頭を抱えていた。

「可南子ちゃんの手はハートのフラッシュ」

「みんなの胸元にカードを挿し込む。そうでしょ？」

瞳子ちゃんに迫って確認した。

「信じられない話だけれど、本当なのよ。よく聞いてちょうだい、私たちの生死に関わる話よ」

「フゴッ、フゴオオ！」

私は口^{くち}にガムテープを貼られ、強制的に飛行艇に乗せられていた。機動スーツ着用のまま降下口に固定され、身動きひとつ取れなかった。

『一分前!』

「フゴフゴフゴッ、フグウゴフウフゴ、フフフゴフッ!」

「何言ってるの？ 日出実さん、何て言ってる？」

ちさとさんは尋ねたが、日出実さんは首を横に振るだけだった。分らないってジェスチャーらしい。

「フゴオ、フゴオー！」

「合図を待つて、スタンバイ！」

私の口に貼られたテープがやつと外れた。これで喋れる！

「この機は爆発する！」

言った瞬間、飛行艇は爆発した。

もう、この展開はどうしようもない。私は戦士たちと共に降下して着地した。

「やった！ 着地したわ！」

可南子ちゃんが危ない！

私は助けようと向かったが、一緒に飛行艇の下敷きになって死んでしまった。

「あうあつ!?」

菜々のイラストが描かれたバスが走っていた。見渡せば見覚えのあるグ

ラウンド。また最初に戻ったようだ。

「口にネジ込むぞ！」

面倒になってきたので途中省略。私は飛行艇から降下し、着地した。

「やった！ 着地したわ！」

今度こそ！ 可南子ちゃんが喜び叫んでるところへダッシュ、全力でタックルした。可南子ちゃんはよろけて倒れ、間一髪のところまで飛行艇は頭上をかすめて落下。

救助成功、次は菜々を助けなきゃ。確かこの辺りに……周囲に気を取られ、正面にいた菜々に気付かず衝突してしまった。

バランスを崩した私たちは、そのまま不時着中の飛行艇内へ倒れ込んだ。

「ごめん。助けようと……逃げないと皆殺しになるわ」

私は振り向きもせず真上に迫ったギタイを撃ち抜き、真横から現れたギタイも粉碎した。どこから出現するのか、もう身体が覚えていた。

「急いで、この機は爆発する」

菜々の手を取って、飛行機の外へと連れ出す。

「早く来て……待って」

私は正面から襲ってきたギタイを攻撃。ギタイが怯んで逃げた隙をついて叫んだ。

「今よ！」

周辺のギタイを撃ちながら菜々に呼びかける。

「早く！」

菜々は呆然と立ち尽くしていた。

「来て！ すぐ爆発するんだって！」

菜々は、なかなか動こうとしない。そして、武器を捨てた。

「どうしたの？」

「目覚めたら、私を捜して」

飛行機が爆発し、私と菜々は爆炎に巻き込まれて死んだ。

「やつ!？」

「立て、三つ編み！」

見慣れたシーン。太仲女子高に戻っていた。

「バレエシューズを口にネジ込むぞ！」

「だけれど、まだ望みはある。戦いは償いだから。地獄の戦場が真の英雄

を生む。薄汚い寄生虫レズも……」

瞳子ちゃんの前説まえせつを聞き流し、私は瞳子ちゃんより先に歩き、体育館の隅っこに向かった。

案の定、体育マットの上でポーカーをしていたので中断させ、トランプを見つかる前に隠した。

直後に瞳子ちゃんが到着。トランプは見られなかったようだ。

「由乃よ、L分隊だよね？ よろしく」

今度は自分から挨拶した。

「上級生では？」

「こうみえて一年生なのよ」

可南子ちゃんの疑問に自ら答えた。

「由乃ちゃんは脱走者よ。あなたたちの責任において彼女を監視して」

「出撃は明朝六時ちようど」

「彼女は間違つてここに来たという妄想を抱いてる。逃亡を……」

「逃亡などしない、あなたたちと一緒にいるわ」

「……ボコボコに叩きのめしなさい」

「案内ありがとう、ロサ・キネンシス・アン・フクトン紅薔薇のつぼみ」

私は瞳子ちゃんと握手をした。瞳子ちゃんは若干の戸惑いとまどを見せつつ去っていった。

「次は何？ 訓練？」

『訓練開始まで一〇分！』

『アン、ドウ、アン、ドウ』

私たちは一斉に校内をジョギングした。このシーン自体は何度も経験しているが、この掛け声は何度聞いても違和感がある。

バレエじゃないんだから。なんでここのだけフランス語なのよ。だけど、もつともツツコミたくなるのはここからだ。

「○アミコンウオーズを、知ってるかい!？」

ジョギングしながら、瞳子ちゃんが大声で呼びかける。

『○アミコンウオーズを、知ってるかい!？』

ダツ、ダツ、ダツ、ダツ。綺麗きれいに揃そろった足踏みと共に、こだまするみんなの掛け声。

「こいつはド偉いシミュレーション！」

『こいつはド偉いシミュレーション!』

ダツ、ダツ、ダツ、ダツ。ジョギングしながら一斉に復唱する精鋭たち。

「かなりスゴイ！ かなりスゴイ！」

『かなりスゴイ！ かなりスゴイ！』

「マリア様には内緒だぞ！」

『マリア様には内緒だぞ！』

「何が内緒なのよ！」

私は叫んだ。ツッコまずにはいられない。ああ悲しき性。

「ストップ！」

瞳子ちゃんの号令で全員足を止めた。彼女は私に向かってくる。

「そこで腕立てを……」

言われる前から私は腕立て伏せを始めていた。

「五十回だっけ？」

「そう、五十回よ。聞いたわね？ 腕立て五十回！ 由乃ちゃんに付き合

いなさい！」

みんな嫌そうに腕立て伏せの体勢に入る。

私は腕立て伏せをしながら、後方から車がこちらへ迫ってくる事を確認した。

「みんな、感謝するわ」

「一回……二回……」

腕立て伏せの体勢のため、みんなの顔は地面を向いている。幸いなことに瞳子ちゃんも私に背を向けていた。

離脱するチャンス！ 車が最接近した隙を狙って、私は車の下に転がり込んだ。

だが、勢い余ってすり抜け、反対側の車輪にひかれてしまった。

「ぴぎやつ！」

私は絶命した。

「何というアホなの……」

瞳子ちゃんは呆れていた。

「望みはある。戦場で手柄を立てるのよ。戦いは償いとなるから」

もう一度、一斉に腕立て伏せをするシーンまで進んだ。

車が最接近した隙を狙って、私は車の下に転がり込む。

またもや勢い余ってすり抜け、反対側の車輪に……今度はひかれる事なく一気にすり抜けた。

試し読み版はここまで

続きは完全版にてお楽しみください。

ここまで読んでくださいますと
ありがとうございます。

オール・ヨシノ・ニード・イズ・キル
(試し読み版)

発行日

2015年5月4日

著者

見月七蓮

編集

TCE (Project C)

発行

See Moon

公式サイト

See Moon <http://yotsuba.org/seemoon/>

©2015 SHICHIREN

MITSUKI

Printed in Japan